

佐々木正著「生きる力 活かす力 自分も相手も高める」かんき出版 2014 年刊を読む

共に創りあげる喜びを愉しむ

1. 役割・ミッション

人間の細胞は60兆個もあるそうだが、みんなそれぞれが大切な役割があるんだね。感動するなあ、役割があるということは—。

- (1)人間の細胞一つひとつは 60 兆分の 1 なのに同じものがなく、細胞同士が役割を連携しあって、時々刻々、生体活動が続いているというから驚く。大切に生きたいという気持ちになるね。
- (2)一方、世界の人口は 70 億人を突破したそうだ。一人ひとり、70 億分の 1 ということになる。
- (3)人間もみんな、それぞれ役割・ミッションがあると感じてもらえる社会の仕組みができるといいな。これが「生きていく」ということなんだ。
- (4)人とのつながりは、家族、学校、会社、地域、社会とだんだん拡大していくけど、そのなかで自分にできる役割を見つけ出すことも大切だ。そのとき、自分一人だけでやろうとしないと楽になるよ。
- (5)これを解決するのが、他人と一緒に創り出す「共創」なんだ。
人類の歴史は、「生存」から「共生」へと進化し発展してきたけれども、21 世紀は、そこから「共創」へとさらに羽ばたいていく時代だ。

P18 ~ P19

2. 役割は思いやりから

役割ってね、「あなたがいてくれたので助かりました」と言われることもそうだよ。喜びや安心を与えたのだから。

- (1)役割の基本は、人が喜ぶことをするという事。
- (2)たとえばエレベータに乗ったときに、いろんな光景があるね。
- (3)次の人のためにボタンを押してあげる人がいる。そのとき、黙って乗ってくる人もいれば、「ありがとうございます」とお礼を言う人もいる。
- (4)私みたいな老人が乗ると、「気をつけてください。よろしいですか」と、もう一言加えて声をかけてくれる人もいる。そういうとき、嬉しくなって、「ありがとうございます。助かります」と返事をする。これだけで一日が穏やかになる。
- (5)このようなことは、老若にかかわらず、どこにいても、いつでもできること。社会のなかで生きていて、周りの空気が少しでも暖くなるような心掛けをすることも、役割と言えるね。
- (6)大きいことだけが、役割ではないんだ。

P20 ~ P21

3. 独創から共創へ

少し前までは独創力が尊ばれたが、最近では、一人の俊英の「独創力」には、限りがあることがわかり始めた。複数の英知が集う「共創力」は無敵だ。これが、日本再生のキーワードになるぞ。

- (1)「共創」と言い出して何年になるだろう。半世紀は超えたかな。はじめに、私の持論である「共創」について簡単に説明しておこう。
- (2)酸とアルカリを一緒にすると、激しい化学反応を起こし、まったく別の化合物を生み出すね。
- (3)夫婦だってそうだよ。生まれも育ちも性格も考えも違う二人が、口論しながらも協力し、子どもをつくり、新しい暮らしを創り出していく。
「共創」の基本は、これなんだ。
- (4)複数の異質の人間が同じ「場」に集って、互いの個性を最大限に発揮しながら議論していくと、どうなるだろう。一人では思いもよらなかった素晴らしい創造物を生み出す可能性が高い。これが「共創」の効果なんだ。
- (5)そのためには、互いを尊敬し信頼し合うという大前提が必要になる。
- (6)女性と男性も、右脳と左脳も、それぞれの良さを発揮させることだ。

P22 ~ P23

4. 締め切りは2年

「締め切り」という期限を決めると、いい結果を生む。ただし、期限は短めに設定することだね。

- (1)目標達成には、「期限の設定」が大事になる。
- (2)会社では、「1期2年」というように、2年を1つの単位としているが、私にはそれとは別に、自身の体験から「2年」がベストと考えるようになったきっかけがあったんだ。
- (3)シャープ時代に日本開発銀行から2億円の融資を受けたとき、「2年で返せば無利息」という制度があって、「それなら絶対に2年でやる」と決め、挑戦し成功したんだ。社内では「とても無理」と思っている人が多くいた。
- (4)根拠など何もなくて、一種の「閃き」あるいは「勘」のようなものだったが、以後、技術開発でも商品開発でも、2年間という期限を設定すると、うまくいくことが多かった。
- (5)1年では短すぎるし、3年では長すぎる。2年がちょうどいいのかもしれない。参考にしてほしいな。

P68 ~ P69

[コメント]

100歳現役 電子工学の父・シャープ元副社長 佐々木正博士が語ったビジネスと人生のヒント集。98歳のときに1年間にわたって開かれた佐々木塾の中で語られた内容も数多く含まれていて、世話人の一人であった私にとって待望の書。共創の思想とは何かがよくわかる。

— 2014年2月14日 林 明夫記 —